生体の科学　70（6）：490，2019

特集「科学と芸術の接点」によせて

栗原　裕基
（東京大学大学院医学系研究科代謝生理化学）

「芸術はなぜ人の心を動かすのか」という問いを掲げ，東京藝術大学では学長プロジェクトとして，澤和樹学長を中心に「Arts Meet Science（AMS）プロジェクト」が推進されている。Science の立場からは谷口維紹博士，西川伸一博士が構想段階から参画し，筆者も運営会議の末席を汚している。これまでに,「芸術と科学に共通するバックグランドとは何か？」,「音楽と医学の学問的融合の発展を目指して」といったテーマの公開討論会が開催され，若手育成の場の提供などを通して，芸術と科学の融合による新たな価値の創造を目指した活動が進んでいる。こうした芸術と多様な学問領域との連携・融合への取り組みは，上智大学における音楽医科学研究センター（時限付のため残念ながら現在閉鎖）をはじめとして，東京大学における芸術創造連携研究機構の発足など，近年になって新たな気運が芽生え始めている。

その背景には，脳科学や AI など新しい科学分野の発展により，芸術創造・鑑賞という人間の高次活動が，これまでよりも幅広い側面で科学研究の対象になってきたことが挙げられるが，根本はやはり，芸術が人間にとって本源的な表現活動であり，芸術をめぐる数々の問いが多くの人の関心を惹き付けて已まないことにあるのだろう。

本特集では，こうした気運を背景に，芸術の表現や受容にかかわる精神・身体活動，あるいは動物行動学や臨床医学などとのつながりについて，長年この領域を牽引してこられた先生方，あるいは新進気鋭の研究者の方々にご自身の研究や関連領域を紹介していただいた。音楽，美術，ダンスなどを対象に，脳科学や運動生理学，認知心理学をはじめ様々な角度から，芸術にかかわる精神活動の根源から進化に至るまで，多くの洞察を含んだ文章に満ち溢れている。本誌としては異色の内容となったが，多くの読者にとって新たな知の領域の展開を予感させる興味深い特集になったのではないかと自負している。

最後に，新しい世代の試みの一つを紹介したい。冒頭で紹介した東京藝大 AMS の活動に呼応して藝大と東大の学生が自主的に集まり，自主講義や勉強会，臨床現場などでの活動を協力して進めている。彼らはそれぞれに高いモチベーションを持ち，柔軟な発想で芸術と科学の新しい融合のあり方を模索している。本特集の企画にも，彼らの協力が大きい。この場を借りて深く感謝すると共に，次世代を担う旗手として新しい世界をわれわれに見せてくれることを期待したい。

©THE ICHIRO KANEHARA FOUNDATION 2019

2026/09/12 16:33:44